

中世曹洞宗切紙の分類試論（十八）

—— 参話（宗旨・公案・口訣）關係を中心として（下） ——

石川力山

五、倭僧關係参話切紙

これまでは若干の例を除いて、主に中国の禅僧について成立し、灯史や語録、さらには公案集に収録された公案・話頭を中心とする参話關係の切紙を紹介してきたが、日本の曹洞禅僧の事蹟についても、その投機の因縁等をはじめとして、話頭として参究され、また参究切紙として成立したものである。これらについても紹介しておくことにしたい。

日本僧關係の話頭としては、やはり道元の如浄との投機の故事をはじめとするものであろう。『三大尊行状記』によれば、その機縁は、天童山安居中は如浄の特別の措置をもって時節に拘らず入室請益していたが、

聞_レ不聞、伝_レ不伝、脇_レ不_レ著_レ席、将_レ及_レ両_レ歳。天童五更坐禅、入_レ堂巡_レ堂、責_レ衲_レ子座睡、曰、参_レ禅者必身心脱落也、祇管打睡作_レ什麼、師聞豁然大悟、早晨上_レ方丈、烧_レ香礼_レ拜。天童問云、

烧香事作麼生。師云、身心脱落来。天童云、身心脱落、脱落身心。師云、這箇是暫時伎倆、私尚莫_レ乱_レ印_レ某甲。童云、吾不乱印_レ。師云、如何是不_レ乱_レ印_レ底。童云、脱落身心。

（『曹全』史伝上、一三頁）

とあるように、豁然大悟して如浄の印証を得たことを伝えている。『三祖行業記』では、如浄の印証の語を「脱落脱落」としているが、この道元投機の「身心脱落」「脱落身心」「脱落脱落」の三句を切紙として伝えたのが「三脱落話」で、永光寺所蔵、寛永六年（一六二九）十一月十七日、久外嬢良所伝のものを掲げる。

〔三脱落話〕

二代曰、永平門下有_三脱落之話、蓋是開山和尚在_二天童_一時、悟_レ也



如何是身心脱落处

（三宝印）

浄云、身心脱落々々身心、元云、這ケ是斬時伎倆、和尚莫乱印、某甲、浄云、吾不印乱汝、元云、如何是不乱印、底夏、浄云、脱落々々、元便自恣、從其元和尚、入宋伝法帰朝、時於西海船中、天雪大降、俄有他神謹現、師前、元問云、汝是什麼、神答云、我是護法善神天号称、太宋国祠正順昭顯威德聖列、太帝招宝七郎大権修理菩薩、送行、元和尚皈朝時以云、白樺星飛化活龍、一声霹靂震青雲、不レ入這般兒女隊、乱翻袖舞春風、

浄和尚□□元和尚以云、莫近国王大臣、不レ居聚落城□、須住深山幽谷、不レ要雲集閑人、從永平道元和尚五世、総持二代峨山和尚不識上之所得機縁之夏、有時朝日之光薄垣影碎見移縁上、豁然大悟、則參瑩山和尚呈所解、山云、於我此不足、可參運良、峨山見良和尚呈所解、良破却一紙云、此時曾如何、峨云、彰亦疎也、良深証明之、私云、不識上一句、□一氣大極点ル至極也、我不被識外神通、不識上之一句ト云也、以世尊三昧世尊不識、迦葉三昧迦葉不レ知、我不被□通、故不識上ト云也、參得底人ニメ始テ可見、

道元の帰国途上における護法神大権修理菩薩の海上航路の擁護の奇瑞に關しては、別にこれだけが「皈朝本則」として別出され単独の切紙として伝承されているものがある。まず、小田原市香林寺所蔵の、天正八年（一五八〇）四月十八日、葉山所伝の「道元皈朝本則」は、

（端裏）道元皈朝本則

永平和尚之秘伝云

初祖道元禪師覽、入宋伝法皈朝時、於西海船中、天雪大降、有俄化神、謹現師前、師問云、汝是什麼神、答云、我是護法善神也、号称大宋国祠山正順昭顯威德聖列大帝招宝七郎大権修理菩薩、伝灯法斎権護灵神也、和尚已伝曹洞無上正今皈本国、我為守護祖門佛法相隨来也、師歡喜而言、若然者假現小神、容納受吾袈裟囊中、即時神滅成三寸之白蛇、而入囊中、船中衆人、皆驚耳目、信感無窮、自余以来、於日本寺院建立立処々、称崇上地神、又会初祖伝戒之二十社、分付吾朝天地便是護法竜天善神、天大感応、兒孫繁栄、処灵驗矣、

古徳看經之法要云、於看經時、外人不寵受、不冤増、内心不レ思善不レ思惡、十二時中須見看經眼、看經意、但能如是、上報四恩、下資三有、誠此如是人者、一期間可天冥慮、竜天恩助、云々、

皆天正八季庚辰初夏念八日、

香林中興現住葉山

というもので、各寺院に護法神大権修理菩薩が奉祠されるにいたる経緯が明記され、看經の口訣も併せ記される。さらに、同じく香林寺所蔵で、永祿十五年（一五七〇）八月四日、宗禅所伝の「皈朝本則之參」は、極めて短い参を内容とする

もので、

(端裏) 皈朝本則之參

天雪大降タル□ヲ云、和尚ノ心ヲヒキ見ウ為テソウ、護法神ト成リ様ヲ、即今修証ナニ因テ、沙門ノ佛法ヲ守護リ走、護法神ト成レ一切ノ義憶念成就ス、又天雪大降タルキヲ、良久ノ云、マツコ、ガ漫タル大虚佛法ノ田地テ走、三寸ノ白蛇ト成様ヲ、縮則ハ方寸ノ中、亦一樣有リ、我為法王於自在、二十二社ト現シ様ヲ、展則遍沙界、畢竟ヲ、大坐禪、
永祿十三年^{庚午}八月四日 宗禪(花押)

というものであるが、参の内容から推測してみても、すでに前掲のような切紙の内容と同旨のものを前提していたであろうことは推測される。

道元と如浄の機縁に関わるものとしては、他にも、道元が臨済の語とされる四種の「無相境」について、境に転ぜられないためにはいかかすべきかについて質問したのに対して、如浄が『金剛経』の経説や祖師の語を引用してこれに答えた「四種無相境」という切紙が愛知県西明寺に伝えられている。これには参らしきものは不随していないが、すでに切紙の内容自体が問答の体をなしており、しかも末尾の記載によれば、身心脱落の話の類則と見られて重要視されたものであった。

中世曹洞宗切紙の分類試論(十八)(石川)

(端裏) 四種無相境

四種無相境

永平高祖在宋日、問天童古佛云、昔僧問臨済云、何是四種無相境、済曰、你一念心疑被地來碍、你一念心愛被水來溺、你一念心嗔被火來燒、你一念心喜被風來飄、若能如是辨得、不被境轉、处处用境、即今如何得不被境轉、古佛曰、一切有為法如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是觀、高祖曰、正當觀時如何、古佛曰、四大性自復、如子得其母、高祖曰、正當復時如何、古佛曰、心外無法、滿目青山、高祖云、日用事如何、古佛云、一把柳絲収不得、和風塔在玉欄干、

此話者身心脱落之類則也、宗門中人不可不參窮矣、

この「四種無相境」の切紙は、機縁の内容としては投機の話頭に類すると伝えられているが、後世に嗣法伝授の後の教誡として示されたとされる、永光寺所蔵の「天童徧界不蔵参」と題する切紙は、嗣法を前提とするという意味ではより深い宗旨を伝えているという位置付けを有するものである。

(端裏) 天童徧界不蔵参

復云

天童如浄禪師、從八月十五日夜半於^テ子^ノ時^{キニ}、道元是^レ傳授^ル歸朝ス、諸佛從^レ伝灯^ル一千五百人、善知識之本命元心、大蔵一紙之大夏也、

是昔曰秘話也、始末上一句答也、徧界曾不藏、曾不藏ト云
 二ツノ点大夏也、徧界曾不藏ト云時、釈迦不出世、達磨不
 西来、先キ也、其時到、目前法只、柳緑見花、紅見、月只
 白、天自高見、甘中甘、苦菘自苦、知、衲僧安著末后一句
 也、時徧界曾不藏也、爰以趙州無賓主合、或吉祥安樂人トナ
 シ、一ケ無心閑道人、白衣形體人、本色住山人、大道落居人、
 魚夫山老落居、衲僧落々堪然活計、仏祖不伝法門、活龍作
 家、無師天性禪、是等ノ類ニ合也、或ワ亦夕白一色ノ根本、
 倒臥横眠無空素、趙州喫茶答話、活法根源、聖人本性、愚ノ
 一字、脱ノ一字、正ノ一字、衲僧不恁麼、衲僧旧夏行履ノ処、
 衲僧安居処、直指ノ一句、南泉十八上ノ活計、達磨無功德、
 洒々落落底、空堂窮、是レ等儀共ニ合セ見ル也、不藏ト云ニ
 眼コヲ著ヨ、

復云、

徧界曾不藏也、先ツ火炉現トモ云也、都芦法身体也、火灯
 用処ハ心也、火也、尽大地此心也、尽大地此一佛性、未輪シタ
 ル也、徧界曾不藏也、是ガ火根本心也、故ニ心包虚空ト也、
 是ワ終始一般、一円相也、始メモ無ク終リモ無ク、始末無差別
 也、此一円相ヲ以テ吾ガ一目ニ比スル也、心ノ一字ニ始メニ打
 ツ点ハ、過去ノ点也、法身佛也、中ニ打ツ点ハ、現在ノ点也、
 報身佛也、後打点ハ、応身佛也、心法ノ二字以テ釈迦出世、
 見明星悟道ノ眼開カ、天上天下唯我独尊、有情非情同時成道
 以、尽天尽地、都炉法身トナス、達磨西来ノ九年面壁シ、一張
 ノ弓ヲハリ、或ハ皮射付、或ハ肉、或骨射付、二祖独リ髓ニ射
 付給、是ヲ都炉法身ト云、道ヲ以テ二祖ヲバ大乘ノ根機ト云

也、其余皆中下根トス、後代ニ淵源ヲ歇起、位裡放提スル夏
 不難、如是尽大地都炉法身ト弥輪シタヲバ、徧界モ不藏也、
 是ヲ老胡ノ知トナシ、教意ニハ廓然トナシ、初学発心トナシ、
 大人トナシ、法命トナス、大悟大徹トモ云イ、佛法眼藏トモ
 云イ、透法身トモ云也、火炉頭ト云ワ一円儀也、左点右只是法
 境界也

この切紙では、「徧界曾不藏」の理解の仕方として、「徧界
 曾て藏れず」と「徧界曾て藏さず」の二訓に分けてその秘訣
 が展開される。この両訓はどちらが正しいかという性質のも
 のではなく、それぞれに宗旨としての内容が含まれていると
 される点に特徴があり、むしろ両様に解される点にこそ、切
 紙として伝えられる意味があったと言える。

道元と如浄の師資の機縁に関わる切紙としては、すでに嗣
 法関係のものや「仏性参」などを紹介済みであるが、他にも
 二十一社や住吉神社の託宣関係のもの、あるいは鎮守白山関
 係のもの等、多数の例が見られる。本稿で紹介したものの中
 で、「身心脱落」の話や、帰国に際しての如浄からの「聚楽
 城邑に住してはならない」などという教誡などは、『宝慶記』
 などで確かめられる事実を前提としたものであるが、こうし
 た史実を前提したもの、さらには『正法眼藏』などを中心と
 した確かな根拠を有する宗教思想に立脚した切紙は極端に少

なく、その殆んどは巷間に伝えられた俗説や、嗣法に対する複雑な儀礼と解釈をとまなうさまさまな觀念が成立して後の、殊更にその伝承を古くし權威を高めることを目的として創作されたものが多いと思われる⁽¹⁸⁾。

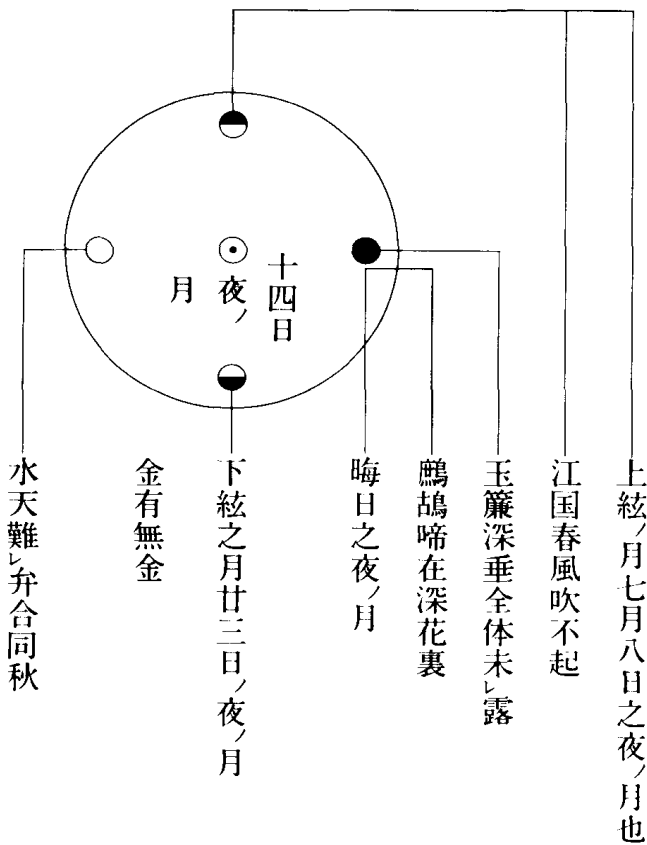
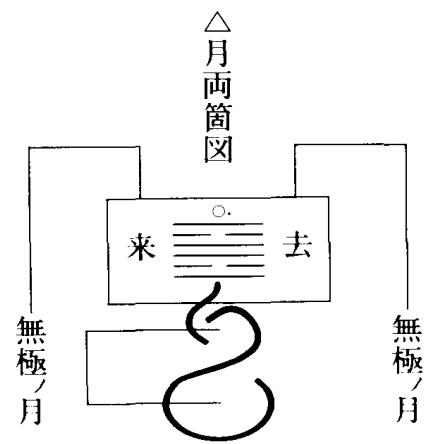
切紙に日本の曹洞禅僧個人の名を冠し、その話頭等を内容とするもので道元に次いで多いのは、峨山韶碩（一二七六—一三六六）であろう。その中でもよく知られた公案となつてゐるのが、師の瑩山との問答で有名な「月両箇」の機縁で、『諸嶽開山二祖禅師行録』によれば、

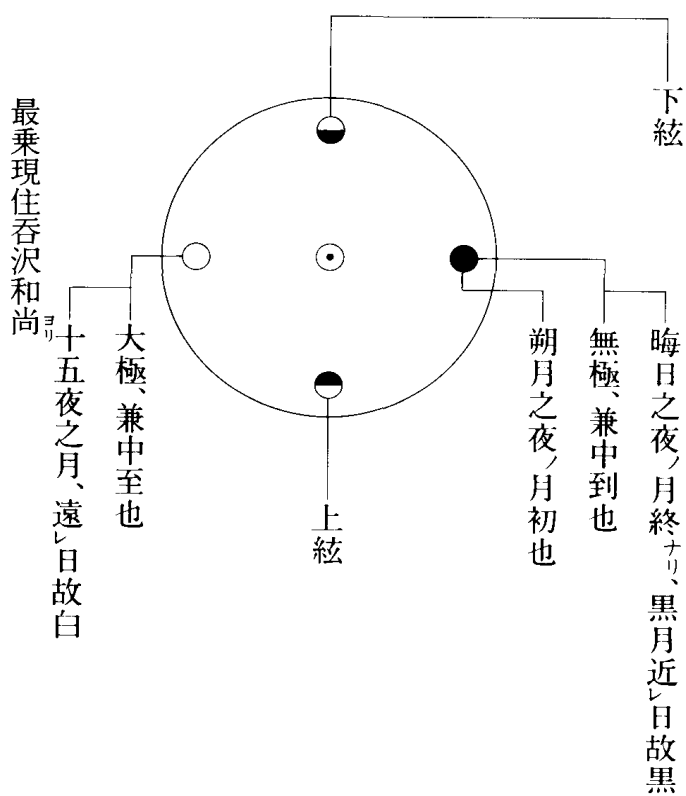
山（瑩山）甞目次、問曰、爾知月有兩箇麼。師（峨山）云、不識。山曰、不知月有兩箇、不能成洞上種艸。師負屈勵志酷切。正安三年十二月廿三日夜半、師对月而坐。山於師耳畔禅指一下。師於比大悟。山曰、蛇胎石時如何。師云、將謂蛇胎石、元來是石胎蛇。山印可矣。

（『曹会』史伝上、二二頁）

という問答であるが、これを二箇對待の問題としての参究テーマとして切紙にしたものが「月両箇」であるが、次に小田原香林寺所蔵の、寛永十五年（一六三八）雪月、最乗寺吞沢より相伝のものを掲げておく。

（端裏）月之両箇之切紙





(花押)

直伝者也

△下絃、廿三夜之月、同円方、△上絃下絃ト云イ、下絃スレバ
 同ニ来時、来去途中迷ニ一色功、△去ルモ白一色、来ルモ白一
 色ナリ、上絃ノ門ヲ下絃ト作シ、亦下絃門上絃ト作故也、是上
 絃白全黒、下絃黒全白、畢竟極全黒ノ門白門偏正黒白陰陽之
 ニツ也、上絃君臣黒凶也、下絃君臣白凶也、
 永平道元和尚ヨリ代々嫡家伝附畢
 于時寛永十五_戊年雪月吉辰

「月両箇」の切紙は、元来は切紙で参究されるような五位説

の援用による宗旨の挙揚とは異なる、極めて機関に富んだす
 ぐれた問題提起であったと思われるが、切紙における扱
 は、その元来の機関性を失って、むしろ理致に近い分析的な
 解釈になってしまった感がある。

また、先に見た「永平秘伝書」の切紙で、峨山の「不識上
 之一句」が取り扱われていることを指摘したが、その話頭
 は、瑩山に参じて所解を呈したところ、これが認められず、
 法灯派の恭翁運良(一二六七〜一三四一)に参ずることをす
 められ、公案禅における自己・智不到・那邊の三段階の境涯
 の進展を極めることを内容としたもので、埼玉県正龍寺所
 蔵、三世格叟寅越(一五八七)所伝の「峨山和尚不識上之
 法語」を掲げておく。

峨山和尚不識上之法語

師、不識之上得所機縁、朝日光薄垣影、碎録上見レ移、豁然
 大悟、即参瑩山和尚呈所解、山云、我於此不足也、可
 参運良、上洛而参良和尚呈所解、良、破却一紙云、此時
 節如何、師云、親疎也、良深証明之、夫以此不識上之一句
 ハ、一氣点太極至極、我不被外神通、不被内智通、故
 云、世尊三昧世尊不知、迦葉三昧迦葉不知、不識上一句、那邊
 不留、古今人知稀、此大意ワ、那邊至極不覺不知也、一氣
 大極二転点処、一氣点大極一点ワ、不覺故不識上一句ト云
 々、那邊一重上大事也、不識下語云、風前野馬過、陰□当底
 々、又鬼箭落風前、又一氣大極二転々処之、金雞報曉天未曉、

又木二花ノサクニ、木ノ躰ハ不識、花ヒラケルハ不識上ノ一句、世尊三昧五葉不知、は無師智、那時ノ通処、サテ又那人不收功ニモ不收也、サテ上バカリ見悪、此無師智ガ不識上那人、從リ那人ニ六合合ト成相形成国土共覺、乃衆生共成、那辺位イテ退不守閑、那辺見捨眼也、閑ト見時那辺退、閑而已時、閑モ不立、那辺ノ至極ハ可入処ナシ、那人ノ全体理ヲ着ル莫無キ故云、纔有モレハ語言、是揀扱、是明白通処呈時一句如此、合頭領解如何、僧、托開師、是ハ父子不立心、次曰、此悟ヲ喚佛智道、為甚麼智不利ト云タゾ、師云、如何是智不到、僧云、不道々々、師云、為什麼不道、僧云、切忌道着、々々頭角生、次曰、如何是不識上、僧恁麼去也、掛棒喝拈袖去、易難ト成答話ト嫌、如何、徳山棒デモアレ、僧ノ一氣發夕后打社ナルベシ、林際徳山出世后、僧入門、棒喝シタルワ、コノ機用、次二功転処、世尊拈花意、師云、悟ヲ無幻空花トハ從、何見フヲ、僧云、自本意見テ走、金屑雖貴、入眼成翳、是レ悟ヲ金屑トサス、次云、天雨露下スニ、地承地万物生長ニ如此、因縁相合此生スト、雖金下不レ知承ト、不知三諸佛全不知、一切ニ於テ如此開眼、罣障ニタ、シヨウジラ子ミテ、内外因縁相応見ル、一身出世スル理如此、父母姪欲ノ機両方尽シ時同時ニ子トナル、少モ姪氣相殘テハ不生、一切ノ諸相ノ上モ如此モ秋冬ニナリ尽シ、落尽シ畢テ、ソコヨリマタ生成スル、如此生落居イカン、曰、只無心ノ二字、我家テハ無心ヲ高ク用、万夏無心ノ作用、次古木龍吟、真見道蜀、識尽眼初明喜識、尽時消息尽、当人何弁、沼中清、此一頌ヲ拈花ノ話ニ合ル、三ノ句迄ハ自己功処ノ様子、此功処ヲハ前二踏去テハ不、

去社全弁ズル濁清モナシ、只当人道へ、当トハ主ト名タモ傍人ヨ、当人落居前曰、不知不覺、全無知不覺トシラヌナリ、次二不識上參ハ、葵花向日一風、柳絮ハ風被吹ニテフカレタシラズ、風ワ吹レ柳絮吹イタトシラヌガ不識上、葵花ノ日ツイテ輪タル迄ガ不識、向日程ニヨレガ一莖ヲバ影ニ藏シタリ、葵ノ異名衛足葵ト云タ、二字ノ心モ足ヲ藏、是レ根本智ヲ藏シタル用処之、是一塵不立ノ用処、不立ノ処ニ立ガ我家ノ大事之、父母両方姪欲ノ機用同時尽ル境イ、全三世諸佛眼力不、此境ニシテ子ノ出ルヲ不立ノ処ト云、ソコヲ安身立命ノ処ト云、日ノ足障子ニ移リタルワ不立ノ処ノ三身、一切如此云事無是家ノ秘、可秘々々、柳絮隨風不語不立身、葵日向日下取立身之、位裡轉側之下語、堂戸深沈機梭暗動不立ノ処迄ハ不識、是ハ陰陽相合境、此境ニ立身スルトワ、不識之上、可秘々々、理ヲ比スルフ好知ル人ト道、是古語、葵花ノ急度向日轉タルワ、久遠今時一エニシタル、葵花ヲアヲイトワ秘メ云メ、ヨモダカノ夏、葵ワ日ニツイテ輪ラズ、ヨモダカワ日ニツイテマワル、如此輪ルヲ我家ノ肝要ニ合スル、畢竟一円相ナリ、私ニ云、日ハ円、側、落、

(花押)

本書散々ニテテニハ相違、格叟一覽シテ尽クナラス、カナ書ワ人前ニイデヌ物ナ程ニ、心ヨカンヨウニスル、ナヲシテモ不苦、此書可秘也、不久參子兒之止啼錢花
天正之此書之

また、峨山が宝一蔵司なるものにと与えた法語の句々について、これを参の形式で注釈した「峨山和尚一枚法語之参」なる切紙が伝えられている。これは「参話」というよりはむしろ、「語録抄」に近い形式のものであるが、峨山関係の切紙を紹介する次で、永光寺所蔵、伝授不明のものを掲げておく。

（端裏）一枚法語之参

峨山和尚一枚法語之参

大休大歇^シ、代、身心元脱落者^{アツケル}デ在^ヨ、●承当^マヲ、代、脱落身心、●徹羊^シヲ、代、寂滅為樂、●驚^シ地^チ、代、手打^ツ呵^ハ々大笑、心ハ、境界捨派^{ノステハ}也、爰^レガ佛智^ニ入^ル句^ク、●承当^マヲ、代、当头無^シ語句^ハ、心、当头無^シ端^ハ仍^テ、言語^ガ出^ヌ又^ゾ、●其^ソ古今^ニ墮^セ又^ワ何^ニ、代、廓落無依^レ了、靈苗^ヲ只^リ自^レ性^{ナリ}、心ハ、忘然^ノ境界^也、佛智^ノ現^ル也、●物表^ヲ独^ニ一^ニ処^ニ、代、拂袖^ヲ去^ル、●承当^マ、代、禪忌^ニ愁著^シ、●其^ソ句^ハ心^ヲ、代、自己^ノ靈光^ニ觸^レ、毒海^ニ墮^リ在^リ走^ル、●淨躰^ニ頼^リ一^ニ代、大口忘然、●句^ハ、代、堪然^ト絶^ト方^ヲ比^テ、心ハ、爰^レガ自己^ノ不^レ点^也、●自己^ノ真照^一ヲ、代、毫釐^有差^ハ、有^レ差^無毫釐、●説破^セヨ、代、自己^ノ功^ト智^不到^功毫釐^ヲ走^ル、●句^ハ、代、合同^一色^不功^々、●此外^ニ更有^一件^ヲ、代、不^レ見^一色^ヲ始^テ是^半提^更全^提底^有時^節、●委悉^一処^ヲ、代、少年^ノ女子^ヲデバシア^ルカ、●何^トテ、代、妙^一字^ヲデ走^ル、●玄^ニ有^レ路^ヲ、代、云、無鬚^子兩^頭揺^ク、●何^ハ揺^ク、代、陰^陽揺^ク、陽^陰揺^クテ走^ル、爰^レ大^心得^{アリ}、●異^中異[、]同^中同[、]代、学^吾胸^ヲサエテ、末^爰

ガ異^中異[、]同^中同^ヲ走^ル、●子^細、代、阿^部曇^伽羅^藍ヲ走^ル、●故^云、驚^驚一^他ヲ、代、大口^ノ忘^然、●何^トテ、代、無^一物^ヲ走^ル、●子^細、代、向^上ニモ不^レ汚^染、向^下ニモ汚^染シ走^ル、●了^々一^真、代、那^時一^句子^ヲ、擲^レ地^ニ作^シ金^聲、大^夏有^レ心^得、●与^麼須^參到[、]辨^取依^那一^地、代、十二^時中^ニ出^息入^息、●夫^取出[、]代、瑠^璃瓶^子口^ヲ走^ル、●恁^麼時^ノ如^何、代、衲^僧止^妄似^レ孩^兒、●此^時消^息一^相似^ヲ、代、幻^人無^レ定^相、●宝^殿無^人一^來ヲ、学^良久[、]●何^ハ境^界ダ^ゾ、代、六^祖元^是嶺^南人[、]●何^ハ、代、天^然坊^主ガ真^実ヲ走^ル、●畢^竟、代、自^契本^心、不^レ授^戒、亦^一透、

●大^休ヲ、代、躍^倒放^身、●大^歇ヲ、代、罷^大歇^ヲ走^ル、●換^骨一^句子^ヲ、代、凡^骨佛^祖骨^髓ニ取^換走^ル、●畢^竟、代、昨^日ハ凡[、]今^日ハ聖[、]●驚^直一^地、学^拶眼^シテ云^ク、看[、]●句^ハ、代、一段^ノ光^明亘^{古今}、●拶^云、不^レ墮^{古今}桃^云タニ、何^トテ^{古今}墮^シタ^ゾ、代、古^在テモ全^古不^レ墮[、]今^在テモ全^今墮^シ走^ル、心^ハ、時^無碍^自在^古今^亘也、●物^表一^頼ヲ、代、不^レ聞^佛名[、]●句^ハ、代、物^表一^親、●淨^躰々^一頼^ヲ、代、生^ヨリ死^到迄[、]二^郎太^郎ト喚^テ走^ル、●句^ハ、代、從^生死^老、只^這ケ、心^ハ、生^死夏^大無^常迅^速ノフ^也、●自己^ノ真^照源^ヲ、代、夜^月輝^ニ寒^潭、松^風貫^髑髏[、]●是^名一^処ヲ、代、視^{自己}如^一冤^家、●何^トテ冤^家ヲハアル^ゾ、代、唾^涕ヲ咄^掛テ、師^ヲ踏^テ、彈^指シテ去^ル、心^ハ、白^骨ニ成^処ヲモ、マダモ人^臭ゾト云^テ削^也、爰^レノ削^派ガカイナケレバ、智^不到^田地^ニ到^難ゾ、三^位時^モ、爰^レガ自己^ノ向^上也、●無^上妙^道、代、金^殿堂^々重^帷深[、]心^ハ、自己^ノ貪^処当^頭ノ君^也、夜^參ノ時^ヲ初^三透^目也、

●此外超方——徹看ヲ、代、玉簾深垂金鉢未レ露、心ハ、本有天然主ノ可也、四臣モ至ラヌ処也、夜参ノ時ハ、法眼宗三透目ノ可也、●妙中——有レ路ヲ、代、和合ノ一滴水ヲ走、心ハ、此一滴ヲ好共玄共真共云也、路ト云ワ、陰ト陽トノ路頭ト也、●異中異ヲ、代、伽羅藍ヲ走、●同中同ヲ、代、阿部曇ヲ走、心ハ、マダ陰ト陽ト合皮シテ何トモ見又処ヲ、異中異共、同中同共云也、マダ体ヲ出又也、●鷺鷥——色ヲ、代云、血クルマツテ出時、何ニモ同ヲ走、心ハ、出タガ汚染無イ時、未分ヲ居タゾ、●何トテ不同色トハ云タゾ、代、類不レ齊、混不レ交心ハ、今時現成エ出タガ、色塵々染時未分也、●了々常——真代、王子王家、生常智、漁人ノ子漁人ノ家ニ産ガ明々常真ヲ走、心ハ、王位ヲ王子ヲ嗣、漁家ヲ漁人ノ子ガ継ダ時、了々常智ツギ目ノ見又処也、曹洞門風ヲハ、文章ヤワラゲテ、或明々、或了々、或陰々、或暗々ト云テ沙汰セヌ也、犯ヌ也、●依——那邊——不守——此時消——相似ヲ、代、爰道ワ見届タガ、更窮限無イ処ヲ走、心ハ、吾宗ワ、自己智不到那邊ガ窮也、在下モ何ガソコニモ止住スゾ、呈ニコソ、登到ニ須弥、猶在天有、更極リガ無イゾ、●宝殿無人——脱ニ鳳来ニヲ、代、爰佛祖沙汰ワ走ヌ、●其デ此人ノ行履ヲ、代、作レ舞マデシキコト也、心ハ、マデンノ曲トハ、ウソ笛ト也、此ノ一透ヲ夜参ニモ可レ合レ見也、諸話頭ヲ可レ合レ見也、最モ秘伝也、護法龍天善神守護之處、

峨山紹碩示宝一藏司処也、
洞谷山永光第四祖、大雄開基碩和尚、示法第十八人所也、

この切紙の素材となった「法話」については、その原本では漢文であったよう、原文が省略されているので内容は推測するほかないが、「大休大歇」の境涯、すなわち道元の場合でいう「身心脱落」の徹処を主題としたものと見られ、その意味では単なる「法語」の注解ではなく、切紙の「参話」とするにふさわしいものであったと思われる。

最後に、これも参話として分類してよいかどうかは保留しておくが、梅山聞本（一四一七）の応永二十四年九月七日における「阿僧紙外、目撃相看、法身法性、大々涅槃」という遺偈を作り遷化した際の状況を切紙としたものを紹介しておく。これは永光寺所蔵、元和八年（一六二二）八月二十八日、明庵東察より久外嬖良に伝えられたものである。

（端裏）梅山和尚一枚紙

梅山和尚逝偈、于時応永二十四年九月七日、於龍沢寺方丈、御涅槃、阿僧紙外、目撃相看、法身法性、大々涅槃、大衆同時聴聞、囉目撃三片、転処也、投機也、甚有投機、自云、此時真無也、真空也、無而无不、至、無而无不、生、無而无不、極、無而无不、周、是即実城当位也、当頭也、当今也、

卷々品々名異体同、到来如々、是即実城如来也、
昔元和八仲秋廿八日

前惣持、宗江比丘東察（花押）

(印)(印)

附与嬖良畢

切紙ではこの梅山の遺偈はまさに投機であるとしており、その意味では梅山の最後の機縁として位置付けることができ、問答体にはなっていないが、大衆も聴聞していた機関の記録であった。ただしその切紙に伝えられる遺偈が事実梅山のものであるかどうかは確証はない。⁽¹⁹⁾

注

(17) 道元の身心脱落の機縁か、道元の証悟の体験を意味する記事かどうかについてはすでに疑問である。

(18) 曹洞宗の白山信仰との関連については、拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(六)―行履物関係を中心として―」(『駒沢大学仏教学部論集』第十六号、昭和六十年十月)に切紙関係の指摘をしてあるが、最近の研究としては、佐藤俊晃「白山信仰と曹洞宗教団史(一)」「(二)」(『傘松』五五六号～五七三号、平成二年一月～平成三年六月)参照。

(19) 梅山聞本の伝は『日城洞上初祖伝』卷上(『曹全』史伝上、五二頁)や『洞上聯灯録』(同、二七〇頁)に立伝されているが、この遺偈は見当らない。